『國民新報』1940年2月25日　[主張]　皇民化の一路

議にいて議議のにいてしたるのにしてかれるをてむべきではないかとふにして、や、はとふをてこれにへた。ち、はにいて、くをしたし、またにいても、のをてのとしてゐるとふのである。そして、それはちの一のスローガンであつて、にくべきである。

　は、でのにし、のをて、ののをされた。ち三千のに九萬くのがあつたことである。このことはよりもにのをするものである。

　やの一のは、であつて、これもももに一するところである。さてはそのであるが、それにいてととのを綜すれば、の一にきるもののやうであり、そしてそのはのと[]をじてのにあるやうである。は十七までに、の六をするまでに、をし、二十五にはのをるだらうとのを、びされた。のでは、よりにをし、四百六十萬ののにらしめることになつてゐる。これによつてれば、十ケをして、のをせんとするとすべきである。

　一にいて、のが、一四百、二年六百より三年のには一三千となり、のによればの年よりはを一して、四五年にはとらざるにするとはれてゐる。

　はり、をれば、の[と]つてはにされるのであつて、そのしはににいてゐるとはねばならぬ。るところはにけるとである。へればにいてはにして、そののための、あらゆるをしてゐるのにして、はととそしてをていなければならない。こゝにのみのとがあるのである。